

様式2

平成 30 年度 自己評価表

鳥取県立鳥取雙学校

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上) 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(たくましく生きる力の育成) 3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成)</p>
---------------------------	--	----------------------	---

評価項目		年 度 当 初			評 価 結 果 (2月)	
評価項目	評価の具体項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価 改善方策
確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上)	(幼) ○体験的な活動ができる環境や機会を設定する。	○きこえにくさによる情報や経験の不足から、興味や関心が広がりにくい傾向にある。	○体験を通して興味を持った事象について考えたり、幼児同士で伝えあったりする。	○興味や関心を広げるように、幼児の実態を把握し個々に応じた話しかけをする。 ○話の内容の理解を促すため、具体物や絵、写真などを補助的に使う。	○季節の行事や遊びを通して経験を広げたり、新聞やニュース、他の人の体験などを自分に結び付けて想像したりできるように環境を設定し、幼児同士の伝え合いが活発になった。	B ○年齢に応じた教材や活動の広げ方を工夫し、幼児が主体的に活動に取り組めるよう努める。
	(小) ○基礎学力が向上するよう、学びを深める発問の工夫を取り入れた授業づくりに努める。	○実態把握や教室環境の整備により学力が定着しつつあるが、長文を読んで内容を深く読み取ったり、正しく質問に答えたりする等に課題がある。	○主発問を的確に行い、反応を予想して補助的・発展的発問を工夫する等の支援を取り入れた授業づくりをすることによって、児童が主体的に深く学ぼうとするようになる。	○的確な実態把握ができるよう、実態に合った検査を実施する。 ○つまずきの記録から支援を検討する事例研究会を行う。 ○一人一授業研究会や授業研究会での成果・課題をふまえて、発問や正しく答えるための支援を実施する。	○「学びを深める発問」についての定義づけや補助発問・発展的な発問の整理をし、発問の工夫の視点から授業改善を行った。 ○一人一授業を全員が行い、児童の実態に合わせた発問を意識した。その結果、授業に意欲的に取り組み、積極的に発言する児童の姿が見られるようになった。	B ○児童のつまずきの傾向をより具体的に検討したり学ぶことを明確にしたりし、教師の発問についてさらに検討していきたい。 ○実態把握のための検査方法・体制等について共通理解を図りたい。
	(中) ○目標を持ち、知識や技能を身につけようとする意欲的に学習する態度の育成に努める。 ○実態把握に基づく支援方法の共通理解と考える力を育成するための支援の工夫に努める。	○基礎学力はある程度定着しているが、苦手意識のある教科や学習内容に関しては意欲が低下することがある。 また、自分の考えを根拠に基づいて説明することが難しいときがあるが、視覚的支援や体験的な活動を取り入れることにより意欲的に学習しようとしている。	○自分で目標を決めることができる。 ○知識や技能を身につけようとする意欲が低下することがある。 ○自分の考えを根拠に基づいて説明できるような発問を行う。 ○諸検査等の共通理解や行動観察等を通して生徒の実態把握を行い、支援方法の共通理解を図る。	○自分で決めた目標について、視覚的に到達点がわかり、達成感を味わえるよう支援する。 ○自分の考えを根拠に基づいて説明できるような発問を行う。 ○諸検査等の共通理解や行動観察等を通して生徒の実態把握を行い、支援方法の共通理解を図る。	○以前の自分を振り返ったり教師の助言を受けたりして自分に合った適切な目標設定ができるようになった。 ○結果を比較して分析するときにそえる条件を聞くなど具体的に発問することで知識や技能を使って思考することができた。 ○各教科等で方策を行うことによって授業の中で自分の考えを根拠に基づいて口頭で説明できる力が身につけてきた。今後はそれを書いてまとめる力をさらにつけていきたい。	A ○教科・単元ごとにどの場面でもどのような発問をするか、整理する。 ○口頭で説明したことを書いてまとめる時間を設定する。
(高) ○個々の生徒に応じた学習指導法の改善・工夫をするともに、自学自習の力をつけるための指導方法の工夫を図る。	○課題の提出等決められた学習についてはこなすことができるが、自主学習については自分に合った学習方法を模索している生徒が多い。日々の授業を活用しながら、指導方法を工夫し、生徒の実態に応じて主体的に学習に取り組む姿勢を培う必要がある。	○自主学習について、個々の生徒が学習時間と目標を設定し、自分に合った学習方法で継続して学習できるようになる。	○個々の生徒のつまずきや特性に応じた課題を共通理解する場面を学部会やケース会議、進路を語る会などで設定し、課題に応じた指導や支援を行う。 ○授業における小テスト、スモールステップでの基礎基本の確認、ノート点検や添削をするなど工夫して生徒の状況に応じた支援を行う。	○ケース会議や学部研究のグループ研究などで生徒のつまずきや特性について共通理解し、個々の生徒の課題に応じた指導や支援を行った。 ○生徒の生活や特性に合わせて学習の課題の出し方等の工夫をし、生徒は課題に対して概ね積極的に取り組めるようになり、基礎的な力を身につけつつある。	B ○個々の生徒の特性や思考力や表現力のつまずきについて、共通理解しながら指導や支援を行う。 ○学部研究で各教師の支援や指導方法について共通理解をする場をより多く設定する。特に思考力を高めるための発問のあり方について研究を行う。	
自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(たくましく生きる力の育成)	(支) ○家庭と連携し乳幼児のことばの育ちを促す。 ○通級指導で難聴への理解を深め自己認識を高めるような指導や支援に努める。 ○個々のニーズに合わせた支援や情報提供に努める。 ○聴覚障がいへの理解が深まるよう啓発に努める。	○子どもへの接し方に支援に必要な親子があり、伝わりやすい話しかけについての意識を高める必要がある。 ○年齢に応じた障がい認識が育っていないため問題解決に向けた行動を起こしにくい児童生徒が多い。 ○支援会議等で本人・保護者・担任との間に考え方や意識の違いが見られ、ニーズの把握が難しい場合がある。 ○医療との学習会で情報共有をしたり、研修会の講師として福祉や教育との連携を図っている。	○子どもや保護者の気持ちに寄り添いながらかわかっていることのできる支援を学び実践につなげることができる。 ○場面に応じて学んだことを活かして問題解決しようとする。 ○難聴に関する研修を行い様々なニーズに対応できるようにする。 ○関係機関と連携し、県内の聴覚障がい児に関する情報交換ができる。	○担当者がかわり方のモデルを示すとともに、視覚的な支援方法を具体的に示す。 ○通級指導の連絡帳を通じて担任や保護者と情報を共有し、児童生徒の課題に対して共通の認識を持ち、連携して支援できるようにする。 ○難聴にかかわる関係者に対し校内研修会への参加を募ったり情報交換の場を提供したりして、難聴への理解を促す情報発信をする。 ○聴覚障がいに関するリーフレットやポスターの配布や啓発活動を行う。	○親子で「楽しい」という気持ちを共有しながらかわかっている活動内容を工夫することで、意欲的にかかわって遊ぶ様子が見られるようになった。「ことば」についてのニーズが増加しており、専門性を高めていくことが必要である。 ○在籍校の担任等に児童の様子を尋ねたり連絡帳の記入をお願いしたりすると、改善する学校がいくつあった。 ○難聴の子どもが在籍する保・幼・小・中に対して、雙学校について積極的に情報発信を行ったが、相談の依頼は少なかった。 ○市町村や病院へ教育相談のポスター等を配布し啓発を行った。雙学校が「ことば」の教育相談を行っていることを知らない幼稚園や保育園があった。	B ○「ことば」についての研修を継続的にを行い、専門性を高めていきたい。 ○在籍校と連携して支援していくためには、通級指導について理解してもらう必要があるため、今年度中に通級指導のリーフレットを作成したり説明会を企画したりする。 ○難聴児の在籍校には、つながりを持つためにも積極的に雙学校から働きかけをし、連携をとることが大切である。 ○東・中部の保育園や幼稚園に教育相談のリーフレットを配布するなどの啓発を行う。
	(幼) ○様々な人とかわかる場を設定し、かわかり方を支援する。	○一緒に遊んだり話しかけたりしたい気持ちはあるが、伝わりにくいためあきらめたり消極的になったりする傾向が強い。	○幼児が互いにかかわり合いながら楽しく活動する。	○自分の思いが相手に伝わる経験を増やすため、教師が幼児同士の仲立ちをする。 ○同年齢の集団で活動する中で集団生活のルールやきまりを身につけるように、学校間や居住地域での交流及び共同学習を実施する。	○学内で積極的に合同活動を行い、幼児同士が協力して一つのものを作ったり相談したりする姿が増えた。 ○地域の方とのふれあいや居住地の保育園での交流を進め、様々な人と積極的に関わった。	A ○教師の支援の方法について学内で共通理解する。 ○引き続き、交流教育を進める。
	(小) ○基本的な生活習慣の定着を図り、社会参加にむけて望ましい習慣や態度を育てる。	○少しずつルールを守ろうとする姿が見られるようになってきているが、基本的な生活習慣、学校生活のきまり等については課題が残っており、指導が必要である。また、社会生活におけるルールなどは未経験であることが多い。	○基本的な生活習慣が定着し、集団活動や社会生活においてきまりやルールを自ら守ろうとすることができる。	○合同学活や特別活動等でモデルを示したりどう行動したらよいか気づけるような声かけをしたりする。 ○場面をとらえて主体的に適切な行動ができるよう声かけを行う。	○「廊下を歩く」「気持ちのよい言葉づかいをする」などのルールを守らなくてはいけないという意識が全体のものとなった。自律はまだ難しい部分もあるが、教師や友達の声かけで、自分の行動を直す姿が見られるようになった。 ○手洗い、うがいなどは養護教諭の指導で意味を知り自主的に取り組む姿が見られた。しかし、早寝早起きなど生活リズムの定着はまだ難しい。	B ○引き続き、合同学活などで指導を行っていく。ルールが守れた時は、その姿を取り上げ称賞していく。 ○生活リズムについては、学習の中で取り組み、振り返りをする場を設定していく。
	(中) ○自己肯定感を持つとともに自分の課題を自分なりの方法で克服しようとする態度の育成に努める。 ○学校生活や社会生活をよりよく過ごすためのソーシャルスキルの向上を図る。	○自分の苦手な部分や課題を自分なりの解決方法で克服することが難しいときがあり、そのままの状態になっていることがある。 ○相手や場に応じた受け答えが難しいときがある。	○自己理解が進み、自分なりの課題解決方法がわかりそれを実践しようとする。 ○相手や場に応じた受け答えができる。	○自分の良さや課題を知る学習を行う。 ○課題解決方法を教師と一緒に考え、実践する。 ○宿泊体験学習や職場見学・交流学習等の校外学習等の事前学習で社会生活に必要なマナーやルールについて知り、実践し、事後学習で振り返る場面を設定する。	○行事や対外的なあいさつ、説明をするという場面においては目標を達成した。 ○同年代の生徒と関わりがある場面では課題が残る。しかし、方策等によって確かな成長が見られる場面もある。	B ○同年代との関わる機会を設ける。 ○自立活動等で適切な関わり方について学習する機会を多く持つ。

	(高) ○常に自立と社会参加を意識した生徒指導の徹底を図り、課題対応能力やキャリアプランニング能力等を育成し、規律ある生活習慣を身につけられるようにする。	○多くの生徒が落ち着いて生活できている。しかしながら、卒業後を意識した行動が身につけていない現状もみられる。そのため、自立や社会参加に向けてさらに自ら考え行動する生活習慣の確立を目指す必要がある。	○将来の社会生活を意識し、規律(時間・言葉づかい)を守り、自ら考えながら学校生活を送る。 ○社会自立のための自己の課題を知り、主体的に解決しようとする。	○生徒が課題意識をもって生活できるように、生徒の課題について全教職員が共通認識した上で、指導を徹底する。 ○生徒版段階表や諸検査をもとに生徒の実態を把握し、生徒一人一人の進路を考えた授業を設定する。	○学部研究会で目指す生徒の姿や課題等の共通理解をして、その都度必要なことについて全学習の場面で指導を進めた。1年生は理想と現実の差について生徒自身が気づき、何をすべきか考え始めたところである。3年生は自ら選んだ進路に向かい、今すべきことに精一杯取り組んでいる。	B ○教師が生徒に関する日々の情報交換を密にし、共通理解を図ることを続けながら指導を続ける。
心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成)	(幼) ○感じたことや考えたことを相手に伝えたり表現したりする力を育てる。	○自分の気持ちを伝えるための表現方法が未熟で教師の支援を必要とする。	○幼児がそれぞれ自分なりの方法で相手に思いを伝える。	○正しい表現方法の定着を図るため、幼児の思いを推し量り拡充模倣を促す。 ○自分の体験や気持ちを表現する場として、絵日記発表の機会を設ける。	○絵日記の活動が定着するようそれぞれの学級で時間を設定し、自分の経験を絵や文で伝える力が育っている。 ○話し合い活動を通して、伝えたいことを自分なりの方法で表現できるようになってきた。	B ○絵日記指導の意味について保護者研修会を通じて保護者に理解と協力をお願いする。 ○幼児の実態を学部全体で共通理解し支援の方法を共有する。
	(小) ○友だちとの活動を通して自分の思いや考えを伝え、相手の話を理解できる力を育てる。	○自分の考えを友だちや先生に主体的に伝えようとする場面が増えている。 ○自分の思いを周りの人に伝えようとする気持ちはあるが、言葉を正しく使って表現することが未習得である部分がある。 ○友だちの話最後まで顔を見ながら聞いて理解したり、答えたりすることはまだ難しい。	○自分の経験や考えを様子や気持ちを表す言葉を使って正しく伝えようとする。 ○相手の話を最後まで聞き、内容を理解し、自分の考えを伝えようとする。	○学習時間内では、相手の顔を最後まで見て話を聞く、はっきりと相手に自分の思いを伝える等の学習ルールを徹底する。 ○学級活動や児童会活動等の集団での時間において、友だちや先生と伝え合う学習での支援を、工夫して実施する。	○「話し方・聞き方」のルールを確認する時間を取りながら学習をすすめた。確認の声かけを受けて姿勢を直したり顔を見ようとする様子がみられた。児童同士で声を掛け合ってルールを守ろうとする姿も見られるようになった。また、相手の話を聞いて質問をしたり、アドバイスをし合ったり、感想を持ってすすんで伝えようとしたりする姿も多く見られた。	B ○今後も「話し方・聞き方」のルールを定期的に確認していく。話し合いの場面を意図的に学習に取り入れる、児童同士の話し合い活動を取り入れる、後で内容を確認する等の支援を工夫していきたい。
	(中) ○弁論大会・体験報告会・交流活動等を通して、自己表現力の向上を図る。	○相手の気持ちや立場を考えずに行動したり自分の思いが言葉で伝えられなかったりすることもあるが、誰とでも話をしようとし、会話を楽しもうとしている。	○自分の考えを根拠に基づいて、自信を持って表現できる。 ○相手の立場や場に応じた表現ができるようになる。	○自分の思いを根拠に基づいて自信をもって表現できるよう帰りの会で発表する機会を設定し、指導する。 ○活動の様子を動画や写真に撮り、良かった点や課題を振り返り、改善していこうとする場面を設ける。	○国府中との交流では覚えた手話や指文字を堂々とした姿で紹介した。質問に答える時間を増やしたいなどの改善点見つけ、相手に分かりやすく伝える方法を考えた。	A ○交流や卓球大会など中学生と触れ合う機会を大切に、積極的に関わるように促す。
	(高) ○現場体験学習等を通して、社会を意識した体験的学習を充実させるとともに、弁論大会や手話パフォーマンス甲子園の事前指導、帯自立活動等を活用し自己表現力を育成する。また、社会自立のために自分の心身の健康と向き合うことができるようにする。	○職場の人間関係を円滑にするためには、コミュニケーション力が必要であることは生徒に理解されつつあるが、積極的なコミュニケーションにはつながっていない。また、自立や社会参加に向けて、自ら体調管理に努めることも課題である。	○交流や現場体験学習等で相手や場に応じて、積極的かつ適切にコミュニケーションをとろうとする力が向上してきている。 ○帯自立活動をはじめ、弁論大会やステージ発表を通して、自己表現力が向上している。 ○自分らしく生きるために心身の健康に関する意識が高まってきている。	○相手や場に応じた適切なコミュニケーションが取れるように、事前に具体的な場面を想定して練習を積み、実際の場面で活かすようにする。 ○帯自立活動を活用し、状況に応じた日本語の使い方(謙譲語・尊敬語)や意味の学習を積み重ねることを通して、一人一人の日本語力を伸ばす。 ○将来の就労や一人暮らしを想定して、ストレスへの対処法や健康保持の方法などについて考える場面を設定する。	○手話言語と日本語の関連性と踏まえて一致しているかいないかを確認する機会を設定し、言語力をのばすことに努めた。 ○他校との交流等、コミュニケーションについて学ぶ場面は設定できたが、積極的に円滑なコミュニケーションが図れるまでには至っていない。 ○生徒の進路に応じて卒業後の生活を想定し、様々な課題に対する対処方法等について学習する場面を設定しているところである。	B ○岩美高校との交流などを通してコミュニケーション能力を高める場を大切に。 ○相手や場に応じた適切なコミュニケーションについて考える時間を引き続き設定していく。

評価基準 A: 十分達成 (100%) B: 概ね達成 (80%) C: 変化の兆し (60%) D: まだ不十分 (40%) E: 目標・方策の見直し (30%以下)